

## 目取真俊「群蝶の木」論 — 暴力の共犯者と家父長的権威

尾 西 康 充

### 1

「誇りをもつて黄色いバッジをつけよう」という社説を新聞「ユーデ  
イツシュ・レントシャウ」に掲載したのは、ドイツ・シオニスト連合の  
編集長ローベルト・ヴェルチュであった。そのときナチスは、一九三三  
年三月五日の国会選挙で連立政権を組んで支配権を掌握し、二三日ヴァ  
イマル憲法に拘束されない無制限の立法権を授けた全権委任法を成  
立させていた。議会政治を終焉させたこの動きに危機感を覚えたアメリ  
カのユダヤ人たちがドイツ製品をボイコットする運動をはじめようと  
すると、ドイツ・シオニスト連合は、それを取りやめさせようとしたの  
である。自分たちは神によって選ばれた民族であるため、他の民族と同  
化してはならないという意識は、同じく強い民族意識で支えられていた  
ナチスの精神と瓜二つのものであった。さらに階級と民族を超越しよう  
とするマルクス主義は、彼らにとって共通の敵であったのである。

シオニズムの考え方は「反セム主義は不可避であり、これと戦って克  
服できるようなものではない。唯一の解決方法は、移住を望んでいない  
ユダヤ人を生成ユダヤ国家に移住させる」こと<sup>(1)</sup>にあった。東欧に定着し  
た同化ユダヤ人 (Ashkenazi Jews) は、パレスチナ移住を最優先させる

シオニストにとって唾棄すべき存在で、たとえ彼らが絶滅収容所に送ら  
れて死の灰になろうとも、「けだし血を代償にしてしか我々は国を得る  
ことができない」と言い切るような態度をとっていた。<sup>(2)</sup>

同じユダヤ人でありながら、「反セム主義には勝ちえないと堅く信じ  
る世界シオニスト機構はけつして反セム主義と闘わなかった」。むしろ  
「反セム主義への適合、そしてユダヤ人国家を手に入れるための反セム  
主義の利用、これがシオニズム運動の中心戦略」になっていた。<sup>(3)</sup> みずか  
らが闘うべき敵に同化してその権力を内面化させ、同族を支配する絶対  
者になってしまふのは、抑圧された社会に共通してみられる現象であ  
る。ユダヤ人の公民権を奪ったニュルンベルク法では、ナチスのハーゲ  
ンクロイツ旗と、青と白のシオニストの旗の二つだけが第三帝国の下で  
公認された——それは「ドイツ・シオニスト連合を大興奮させた事態で  
あった」<sup>(4)</sup>——のは、彼らが共犯関係にあった象徴的なできごとであつ  
た。

目取真俊の「群蝶の木」は、初出が「別冊週刊朝日小説トリップ」  
二〇〇〇年夏季号（二〇〇〇年六月）、初収が『群蝶の木』（二〇〇一  
年四月、朝日新聞社）である。戦争中とはいえ、日本軍に召集されたウ  
チナンチューが同じウチナンチューに対して凄惨な暴力をふるった。

「時として、忠誠心を示そうとしてか、スパイ容疑で捕らえられた沖縄の住民に対して、彼らがヤマトの兵隊以上に苛酷な仕打ちをする」のであった。

さらに「群蝶の木」は、軍慰安婦 (Military Sexual Slaves) の問題を描き出している。沖縄戦当時、約一三〇にも上る慰安所が沖縄に設置されていた。作品に登場するゴゼイは、戦争中は日本兵に身体を弄ばれ、戦争が終わると米兵相手に身体を売る慰安婦であった。「村の女達が襲われないように」ウチナンチューの指導者が売春を強いたのだが、ゴゼイは彼らを「呪い殺したかった」。そして「何で部落の人間でもなければ、あんたらの言う婦女子でもないうちが、あんたらの妻や娘を守るためにアメリカ兵達の相手をしないといけないね」と憤るのであった。「ジョーセイ、助けていとなせ、兵隊の我ん連れてい行くしが」というゴセイの叫びは、読者の胸に残る。南城市にある糸数アブチラガマは、現在でも見学できる唯一の戦跡壕である。南風原陸軍病院の分室とされたその洞窟<sup>が</sup>には、傷病兵約六〇〇名と現地住民二〇四名が退避していた。ひめゆり学徒一四名がそこで看護に当たっていたことが知られているが、全長二七〇メートルに及ぶ洞窟には、朝鮮人慰安婦と日本人慰安婦それぞれ六、七名がいた。<sup>⑤</sup> 負傷者以外の日本軍関係者は、少尉と軍曹各一名のほかは軍医と一〇名前後の衛生兵しかいなかったとされるが、<sup>⑥</sup> 断末魔の叫び声が聞こえる地下の暗闇のなかで、なぜ慰安婦がそこにいなければならなかったのか——一九四二年から四四年にかけてナチス親衛隊は一〇カ所の強制収容所に売春施設を設けた。特権的な男性囚人が強制労働を通じて高い業績をあげるための「刺激剤」にしたのであった。<sup>⑦</sup> 死と背中合わせの強制収容所に、売春婦が存在した事実をどのよう

に解釈すればよいのだろうか——。

暴力によって畏怖させる支配者と闘うのではなく、その共犯者となつて同胞を虐げ、女性を辱めようとする人びとの現実を、「群蝶の木」を通じて検討してみたい。ウチナーグチを多用し、視点人物を替えながら過去と現在を自在に往還する語りの手法は目取真独特のもので、その方法が使われた「群蝶の木」は代表作の一つとして数えられる小説である。

## 2

村の御獄<sup>うたき</sup>前の拝所<sup>うがんじゆ</sup>周辺の家に生まれた義明は、三十代半ばすぎ、那覇にある大学を卒業後、県職員に採用された。四年間宮古島で生活した以外は那覇で住み続け、実家に帰るのは旧盆の他年に一、二回しかなかった。<sup>⑧</sup>

豊年祭<sup>むらんどうい</sup>は四年に一回おこなわれる。御獄<sup>うたき</sup>の森を背後にひかえた拝所<sup>うがんじゆ</sup>の庭で二日間にわたつて、奉納の棒術や踊り、芝居が繰り広げられる。「群蝶の木」では、「評議会<sup>やうぎかい</sup>員や老人会、婦人会、青年会などの代表で作られた実行委員会で、役所<sup>やくしよ</sup>が割り振られた」と配役<sup>なしやく</sup>の選定<sup>せんてい</sup>が記される。約一カ月前から練習がはじめられるが、一人一役ではなく、(戦前は女性が踊りに参加できなかったこともあって)いくつもの芸を受け持つことがあった。『仲宗根誌』によれば、「そのような芸人の苦労は大抵ではなく、中にはあまり役をもちすぎて、練習期間中やせ細るものさえあった。それでも芸人達は愚痴一つこぼすことなく、「村事」であるという意識のもとに一生懸命練習に励んだ」<sup>⑧</sup>。戦後になると女性も

参加するようになり、「近年では、豊年祭りは村行事、村御願であるので、上手、下手は別として、部落民全員が参加すべきであるとの考えから仕立方、舞台出演者、旗頭、棒組、路次楽、あるいは事務的な役務等に配置され、豊年祭りをみんなで盛りあげて行く」とされる。だが村をあげての祭りになると、その反作用としてそこから排除される人間も発生してしまうのである。

沖繩では同じ豊年祭といえども村ごと字ごとに特徴がある。旧暦八月一〇日前後——「群蝶の木」の時間設定は九月下旬——五穀豊穡を神に感謝し、村の芸能を神へ奉納するという年中祭祀の一つである。山原では「〃神への奉納」という意識をしつかり感じる事ができるのが、ウタギく神アサギく舞台という軸線」で、「ウタギの神を神アサギへと迎え入れ、その神アサギに迎え入れた神へ奉納芸能を堪能してもらう」という。「群蝶の木」にも描かれる、能「翁」に似た「長者の大王」という舞踊は、白髯の老翁が大勢の子や孫を連れて登場する。折口信夫は、この村踊りが「遠方から来臨する祖霊及び眷属の遊びに、其源を発して居るのである」と指摘している。義明は「日頃、琉球芸能を見る機会は少なかったが、けつして嫌いではなかった。むしろ三十歳を過ぎてから、生まれ育った島の音楽が、自分の血の中にも流れていることを自覚させられていた」とある。その一方、高校の同級生Tが自殺も疑われる死を遂げたことから、「この地域に生まれ育って、この歳になったものにはな、何か共通する、こう、みんながTみたいになるというわけではもちろんないがな、何か共通するもの」が流れていることを感じている。

二日目の土曜日の午後、神女の祈願の後に道連ねーがおこなわれる。棒術と踊りの組みとの二つの旗頭を先頭に、総勢三〇〇名近くが行

列に参加し、それぞれ演技を披露する。沿道の観衆のなかから「ひやさき、ひやさき、と声をあげて、カチャーシーを踊っているように手足を動かしている老女」がフォークダンスの列に近づいていく。「腰のあたりまで垂れた髪は黄ばんだ灰色で、目鼻立ちもはつきりしないくらいに陽に焼けた顔。小柄な体を包んだ着物は、何日も着っぱなしのようだった」。義明は「五メートル以上離れているのに漂ってくる異臭に顔をしかめ、アスファルトに濡れた裸足の足跡がつくのを目にし」た。「手を振った勢いで着物の前がはだけ、片方の乳房がはみ出る。女子中学生達の笑い声に振り向いたゴゼイが、歯のない口を開けてヒヤ、ヒヤと声をあげ、勢いづく。長い乳房が大きく揺れる」。役場の職員や警官に保護され、女性たちになだめられて落ち着いたようにみえたが、ゴゼイは「ジョーセイ、助けていとらせ、兵隊の我ん連れてい行くしが」と大声を発して義明に向かって走ってくるのであった。

ゴゼイは半年以上前から少しずつ異変を生じ、「スーパーに入っていく商品に手を出して口に入れたり、昼となく、夜となく部落内を徘徊する。食事は隣近所の人々が哀れんで残り物などを世話していたが、風呂に入ることもなくなり、髪を乱し、異臭を放ちながら歩く姿」がみられた。

琉球古典舞踊の踊り手が観客を魅了する間、ゴゼイが「兵隊の来よるど、諸人、早くなあ逃げよう」と大声をあげて乱入する。「スピーカーの音楽にも負けない声で叫んだ拍子に帯が解け、左右に開いた着物の間に痩せ衰えた裸体が現れる。柄を振るたびに長い乳房が揺れ、そこだけ黒く若々しい陰毛が照明に浮かび上がる」。このような姿は、記紀の世界に登場する天宇受売命（天鈿女命）を想起させる。天岩屋戸の内に

隠れた天照大神を招き出すために、伏せた桶を踏みとどろかして踊りながら、乳房と陰部を剥き出し、天神たちを哄笑させた。性的狂態によって太陽神を復活させたというエピソードは、霊力を通じて病める肉体や魂を治癒したという古代のシャーマンの姿を想起させるが、だがゴゼイの悪態は「人の過ち・手落ちを誹謗する」という来訪神——ただし言祝ことほぐことの決してない、共同体の過去の記憶を呼び覚ます媼——といえな

## 3

豊年祭の行事のなかで観客が一番楽しみにしているのは、芝居であった。戦前から伝わっている脚本がいくつかあってそれを交互に上演している。「群蝶の木」では、「明治後半から大正、昭和の初めにかけて、東京や神奈川、大阪などの紡績工場を中心に出演にいった村人達が体験したことを材料にしたものがほとんどだった」。それらのなかには、「当時東京で演じられていたプロレタリア演劇を沖縄方言でアレンジしたものもあり、本土の研究者が調査にきたこともあった」という。

初日の芝居は「沖縄女工哀史」である。「大正時代に神奈川の紡績工場に出演にいった少女の話」で、出演者はみな素人であったが、「琉球芝居のプロの役者に演出と演技指導を頼んだというだけあって、なかなか見応えがあった」。

チルーという主人公の少女が、寮で同じ部屋に住んでいる同僚と喧嘩して、「沖縄人、豚殺し」と罵られたり、工場の近くの食堂に「朝

鮮人、アイヌ、琉球人お断り」という紙が貼られているのを見て立ちすくんだりする場面になると、涙を流す老女やビールの空缶を握り潰し、「腐れ大和人、打ち殺せ！」と野次を飛ばす者があちこちから出た。

義明も、神奈川の紡績工場に出演にいった祖母から同じような話を聞かされていた。彼女は、琉球人差別反対運動を闘っていた祖父と知り合った。今帰仁村仲尾次で生まれた目取真の祖母も十代の半ばに神奈川県の紡績工場に出演に出かけていたという。町の食堂に「琉球人、朝鮮人お断り」という張り紙が貼られていたり、他県からの女工と喧嘩になると「腐れ沖縄、豚殺し」と馬鹿にされたりしたことを祖母から伝え聞いている。出演の女工は最初に東京見学をする。皇居の門衛に「一目で良いから天皇陛下を拝ませてください」とお願いした祖母に、「物も言わずに顔の前で手を横に振った」。彼女は自分が差別されているのだと頭にきて、「腹いせに宮城前の植え込みで小便をしようとした」という。<sup>13</sup>

「沖縄女工哀史」のチルーは、同じ工場で働く「地元の男」にだまされて妊娠する。会社を誹首され沖縄に帰ってくるが、「父親に激しく殴られ、母親や兄弟にも蔑まれて、那覇の町に出て一人で子供を産む」。だが一歳の誕生日に子どもを捨ててしまい、仕事を転々とした後、最後は「遊女」——琉球語で尾類（ジュリ）——と呼ばれる。ちなみにチルーという名前は、琉球王国の時代、遊女で歌人であった吉屋チルー（一六五〇—一六六八）を想起させる——に身を落としてしまう。

沖縄戦当時、慰安所を設置するために、日本軍は抱親（アンマー）た

ちを集めて協力を要請した。ストーリーからみえてくるのは、ヤマトンチュからの差別だけではない。借金の形や口減らしのために出稼ぎに出た娘が窮地におちいって帰郷しても、彼女を保護するどころか「家の恥」として追放してしまうウチナーにおける家父長的権威主義の実態である。皇居前の植え込みで小便をしたという目取真の祖母の姉も、出稼ぎにいった紡績工場で「精神に変調をきたし、沖繩に戻ってからも曾祖父の暴力的な抑圧にあつて気がおかしくなり、不幸な死に方」をしたという――家や共同体から排除されて精神を病んだ、あるいは認知症も疑われる老いを迎えた彼女たちの姿は、ゴセイや「平和通りと名付けられた街を歩いて」（「新沖繩文学」第七〇号、一九八六年一月）のウタに共通する特徴がある。

沖繩の労働運動に詳しい福地曠昭氏は、本土の紡績工場に出稼ぎに出た沖繩の元女工たちにインタビューした記録を『沖繩女工哀史』（一九八五年三月、那覇出版社）にまとめている。大正から昭和のソテツ地獄――サツマイモを確保することもできず、ソテツ（猛毒を含み、調理法を誤ると中毒死する）を常食とせざるを得ないほどの苦境にあった――によって「幼児の売買が盛んになり、インザ（奉公人）やイチマンウイ（糸満売り）、そしてジュリウイ（尾類売り）も、その頃の農村の貧しさゆえであった。山原、それもとくに山間部落では農地が少ないうえに人口は多く、その日の食事にと欠く時代であった」という。<sup>(16)</sup>

目取真によれば、『山原』<sup>やんばる</sup>という言葉には差別的なニュアンスが含まれていたとする。

今ではウチナンチュも抵抗感なく「ヤンバル」という言葉を使っ

ていますが、北部地域を指す「ヤンバル」という言葉には、もともとは差別的な意味が含まれています。首里を中心とした那覇から見れば、「ヤンバル」というのは山に囲まれた野蠻な田舎で、「ヤンバラ」（ヤンバルの人）<sup>(16)</sup>という言い方には、侮蔑的な響きがあります。

沖繩の内部にある地域格差を認識しなければ、一九五〇年代に辺野古地区がキャンブ・シユワブ基地を誘致し、九五年以降、普天間基地の移設先として辺野古が浮上したのか、が分からないという。

大分県の富士紡績大分工場では、それまでの朝鮮人女工が集まらなくなつたので、一九三〇年頃から沖繩の女性を募集した。被差別部落にも大々的な募集がおこなわれていたとされる。<sup>(17)</sup> 和歌山紡績手平工場に勤めていた大城ウシによれば、「沖繩の女工は名前も書けなかったもので、朝鮮人と同様にいやな目で見られていました。わたしとこの工場に一緒に入社したのは三十人でしたが、そのうちの二十人が自分の名前を書けない女工たちでした。学校も十分にでない人たちだったので文字が書けるはずもなく、無理もないことでした」と証言している。<sup>(18)</sup> さらに、三重県の東洋紡績に勤めていた島袋サダは「紡績男工に惚れるなよ／智慧ない 金ない 甲斐性ない／甲斐性どころか 家もない」と歌って憂さ晴らしをしていたという。<sup>(19)</sup>

紡績工場に出稼ぎにいったり、遊郭に売られたりしたウチナーの女性たちは、帝国日本の底辺に位置づけられていた。沖繩における慰安婦を調査した先駆的な取り組みとして、『戦争と女性――「慰安所マップ」が語るもの』（第五回「全国女性史研究交流のつどい」第一分科会メンバー、一九九二年九月）があげられる。この報告書によれば、「沖繩の



港町、那覇はもちろん、名護、今帰仁、嘉手納、与那原などはいまい宿が多く、旅館として、私娼たちを酌婦の名目で置いていた<sup>(20)</sup>。そのため沖縄戦当時の状況を調査したものの「今回与那原や今帰仁で慰安所が見つからなかったのは慰安所の『商売』が特殊なことではなく、日常のこととしてとりたてて意識することではなかったからではないか」と推測している<sup>(20)</sup>。

「群蝶の木」では、ゴゼイは日本軍の将校、用の慰安婦であった。彼女とは別に、下級兵士を相手とする朝鮮人の慰安婦がいた。改装した旅館が慰安所にあてられていた。沖縄戦当時、慰安婦とされた女性は、朝鮮人が一〇〇〇人、沖縄の遊郭である辻出身の女性が五〇〇人、日本本土、台湾の女性も若干数いたのではないかと推測されている。民家や公民館などの既存の建物を利用した慰安所がのべ一三六カ所あった<sup>(21)</sup>。一九九一年八月、金学順<sup>キムヘクスン</sup>は慰安婦であったことを韓国ではじめて名乗り証言した。この影響を受けて九〇年代後半になると朝鮮人は「強制連行された女性たち」、日本人は「公娼制度に組み入れられた女性たち」という対比が強調されるようになった。玉城福子氏によれば、沖縄の自治体史にもナショナリティの境界線が引かれて記述されることが多くなつて、「日本人「慰安婦」を犠牲者の範疇から排除する」傾向がみられるようになった。日本人「慰安婦」には、大和人と沖縄人の両方が含まれ、朝鮮人「慰安婦」との対比の中で沖縄人「慰安婦」は不可視化され、暗に日本人に含まれる形で提示されていたとする。朝鮮人慰安婦の場合は、「妻Ⅱ母」の女性として彼女たちの犠牲には共感する面があるものの、外国人であるために共感され得ない。他方、ウチナンチューやナイチャーは同じ日本人であるために共感され得るが、「娼婦」であるために共

感されない。ナショナリティと性の二重基準（「妻Ⅱ母／娼婦」）、どちらの女性も結局は「犠牲者をめぐる共感共苦<sup>コンパッション</sup>の境界線」の外側に位置づけられるというのである<sup>(22)</sup>。だがそもそも、ナイチャーと同じであるとかテゴライズされてしまうとウチナーの犠牲の実態はみえてこない。彼女たちが受けた差別の実相をとらえ直すことが求められるのである。ところが玉城氏によれば、沖縄戦史の記述をめぐって県幹部や行政担当者批判した「沖縄の知識人」にも「家父長的な性の規範」が入り込んでいたという。

性の二重基準による女性の分断（「妻Ⅱ母／娼婦」）に疑問を持たない普通の住民は、売春する女性を排除したり、性暴力被害者を家族や地域共同体の恥と見なし抑圧してきた側面がある。沖縄戦時に限っても、住民という語には、朝鮮人、「慰安婦」、障がい者は暗に排除されてきたのではないか。「慰安所」やAサインバーの女たちは、性の規範からはずれた者とみなされるがゆえに「我々」から排除される<sup>(23)</sup>。

この結果、「沖縄の知識人」は「悪意もなく、無意識のうちに「慰安婦」やAサインバーの女性たちを沖縄戦や沖縄の戦後の歴史の中で不可視化することに加担してしまっていた」とする。「家父長的な性の規範」を知らぬ間に内面化させる共同体から死角の位置に据えおかれた慰安婦は、だからからも顧みられずに歴史の闇へと葬りさられようとしていたのである。

4

米軍は、日本軍の敗残兵が民間人にまぎれ込んでいないかを調べるために、軍服を脱がせて日焼けの度合いをみたり、針で手のひらや足のうらを刺したり、肩を調べて背囊の跡がないか確認したとされる。「群蝶の木」では、「全身から森の匂いがし、潮の匂いがし、古木のように超然としたところ」のある昭正の肉体は、ゴゼイに「生きた男の体を抱いたのは初めてだった」との感覚をもたらしした。風呂焚きや掃除、客の使いなどの雑用を旅館で担当していた彼は、事故を装って左の首を石で砕き、かまどに突っ込んだ。ゴゼイには、昭正が「知恵の足りないような言動、粗末な身形をしているのも、人を欺くため」であるのが分かっていった。

旅館に帰れば、腐った青白い体に触れられるのもおどましく、特に石野という部隊長の、紫色の菌肉から血と膿のにじむ口をわざと近づけ、嫌がるゴゼイを見て喜んで顔を見ると、殺意を抱かずにはおれない。

「日本軍の将校達の腐った白鳥賊のような体」に虐げられるゴゼイにとつて、「友軍に媚を売って助けてもらおうと思ひ、抜け目なく商売をしている村の連中など、みな死に果てればいいと思う」。ゴゼイは親がだれなのかも知らず、娼館の奉公人として子守や水汲の日々を重ね、昭正と出会った二三歳まで娼婦として生きてきた。

連隊陣中日誌によれば、一九四四年八月はじめ本部半島に移駐した

独立混成第一五連隊は、一〇月五日に本部町渡久地に軍慰安所を開設した。<sup>(24)</sup>同第一大隊は、謝花慰安所を開設するため、一月六、七日に副官が今帰仁村に出張し、「慰安婦招致」——旅館や料亭の経営者に「慰安婦」集めを手配した——をおこなった。<sup>(25)</sup>同第一六中隊と海軍第二七魚雷艇隊が配備されていた今帰仁村には、運天港の近くに慰安所が設置された。一九四四年秋、仲宗根にあった民間の宮城病院を利用して慰安所が設置された。宮城貞重医師は軍医として召集され、彼の家族は九州に疎開していたため不在であった。

米軍が上陸し、日本軍がゲリラ戦を展開すべく山中に立てこもっている間、米兵の強姦対策として住民が慰安所を設けた。慰安所の実態を調査した古賀徳子氏によれば、今帰仁の周辺はつぎのような状況であったとする。

戦前から運天港の近く（今帰仁村字仲宗根）にあった料亭の経営者が日本軍の命令で、慰安所を経営することになり、幼い頃に中南部から料亭に売られてきた沖縄の女性五、六人が「慰安婦」をさせられた。一九四五年三月二三日に本部半島への艦砲射撃が始まり、地元住民は山中に避難した。経営者と女性たちも同様であった。しかし、独立混成第二歩兵隊（宇土部隊）が反撃せずに多野岳に撤退したため、五月には住民は山を下り、元の集落に戻りつつあった。「慰安婦」の女性たちも経営者の出身地である宇越地に身を寄せていた。当時、米軍による強姦事件が頻発した。それに頭を悩ませていた区長らが、経営者の提案で、強姦対策として米兵向けの「慰安所」を設置した。集落で最も大きい家が提供され、家の前には米兵が行列をつくった。日本

軍の慰安所にいた女性たちはここでも「慰安婦」をさせられたのである。女性たちは毎日一〇数名の体の大きな米兵の相手をさせられ、「つらい」と話していたという。「慰安所」は住民が収容所に移されるまでの約一カ月続けられた。<sup>(26)</sup>

右のような状況におかれた今帰仁村で、目取真によれば、米兵用の慰安所を設ける中心メンバーとなったのが「慰安所に女性を斡旋していた旅館の主人と、当時警防団長をしていた私の祖父」であった。米兵と「料亭の主人」が交渉しているそばにいたのを目撃されたために、祖父が敗残兵からスパイ視される原因になったという。<sup>(27)</sup>「今帰仁整理」——敗残兵によってスパイと目された住民を肅清する——という言葉が伝わっている。

「今帰仁村の戦時状況」（『沖縄県史』第一〇巻所収）は、今帰仁村在住の男性五名が座談会形式で往時を語っている。字湧川の糸数昌徳は、山に潜伏していた敗残兵が村に下りてきて、米軍に協力している村民の名簿を作成し、彼らを殺害すると告げられた。殺害リストに記されていた村民の一人は、料亭を経営していた宮里政安であった。糸数は敗残兵に向かって「あんた方、誤解ですよ」と訴えた。「一般の婦女子が米軍に強姦されて、たいへんなことになる」ので、宮里は料亭の女性を「提供」して米兵用の慰安所を設けた。彼の「婦女子を守ろうという精神」は「決してスパイ活動ではない」、「こんなになりっぱな、住民を護ろうとする考え方」を説明して、辛うじて「今帰仁整理」を免れたとする——その一方、宮里は早くから米軍に協力していたおかげで「良民証」を発行してもらい、堂々と馬車で移動していたという。<sup>(28)</sup>

「群蝶の木」では、戦後になってからゴゼイに「米兵相手の売春旅館に入ってくれないか」と勧誘したのは「戦争中、日本軍の将校相手の慰安所になっていた旅館の主人」であった。米軍の収容所で生活していたゴゼイに、「島袋というかつての主人と内間という収容所内で部落の世話役をしていたという男」は「執拗に頼み込んだ」。彼女は「戦争中は日本兵に体を売っていた自分が、戦争が終われば次は米兵の相手をするものと、決めてかかっている島袋や内間という男達を呪い殺したかった」。それでも彼女が引き受けたのは、村でそのまま暮らしてもよいという許可を得、米軍の資材を使って小さな家を建ててもらう約束をしてもらったからであったという。「収容所内で部落の世話役」をしていた内間は、戦時中は警防団長を務め、戦後は区長を一〇年以上、村会議員を三期務めたとされる。現在九〇歳をこした内間が執筆に加わったという字史は、「箱入りで表紙が布張り」の「五百ページ以上もある立派なもの」であったが、昭正やゴゼイのことはまったく触れられていなかった。

公式の歴史からは一顧だにされない存在であったのである。

## 5

あっけなく降伏するような日本軍になぜ、ナイチャーは忠誠を誓わされて虐待され、挙句の果てに虐殺までされたのか。そしてなぜ、慰安婦は留め置かれねばならなかったのか——。圧倒的な米軍を前に、石野の部隊は山奥の洞窟に潜伏し、逃げ回るだけであった。十数名の部隊には、ゴゼイと朝鮮人の女性二名が連れられていた。ゴゼイは「こんな山奥の



洞窟にまで逃げのびてきて、米軍に一方的にやられっぱなしの腑抜けどものくせに、女の体を弄ぶことはやめようとしな腐れ男ども」「腐れ日本の兵隊にあんし哀れさせられてや」と憤りを感じている。

だが同時に、石野に「媚を売ろうとしていた自分が情けなくて、今すぐ、この洞窟もろともすべて爆破されてしまえばいい」と感じている。監禁状態にある女性が生きながらえるには、支配者の男性による庇護を受けようとするのもやむを得ない。崖の下にある洞窟には五〇名近い村人が避難していた。三〇歳をすぎた昭正もそのなかにいた。日本兵が食糧の徴発をはじめ、抜刀した石野が「黙れ」と怒鳴る。それまでに三名のウチナンチューがスパイ容疑によつて殺されていた。村人たちへの「同情」も抱いたが、ゴゼイは「兵隊達のおこぼれにあずかっている身」であった。昭正に対しても「自分が日本の兵隊達の側にいることが後ろめたく」、去り際に目をやると「憎しみに光る村人達の目の中に、一段と鋭い光の昭正の目があつた」。ゴゼイは「村人達だけでなく、昭正まで裏切ってしまった」ことに絶望するのであつた。日本兵と行動をともしている慰安婦は、住民たちの敵とされていた。そのことが彼女たちを救済しようとする活動が戦後発展しなかつた理由であつた。

他方、スパイ容疑を着せられた昭正は、与那嶺という名前の首里出身の将校に殴られる。他にも嶺井や大城という沖縄の兵士が虐待に加わり、洞窟の外に連れ出されて殺されてしまう。なぜウチナンチューが同じウチナンチューの虐殺に加担するのか。プーリモ・レーヴィによれば、アウシユヴィツには「ユダヤ人の名士」がいた。「奴隷状態にある何人かに、仲間との自然な連帯関係を裏切れば、ある特権的な地位、ある種の快適さ、生き残れる可能性を与えてやると持ちかけたら、必ずそれ

を受け入れるものがある」。そして「抑圧者のもとでは吐け口のなかった彼自身の憎悪が、不条理にも、被抑圧者に向けられることになる。そして上から受けた侮辱を下のものに吐き出す時、快感をおぼえるのだ」という<sup>(29)</sup>。戦時下の沖縄も、日本兵に常時監視され、自由に話すことさえ禁じられていたという意味では、ラゲリ体制に似た状態におかれていたと考えられるのではないか。そこでウチナンチューが同じウチナンチューに対して嗜虐的な暴力を加えるという事態が発生したのである。

「昭正の血の臭い」を放ちながら石野はゴゼイを殴りつけて性交しようとする。しかし、米軍が攻めてくると「洞窟の入口で威嚇発砲しただけで」石野の部隊は降伏してしまう。「全身が冷えきつて痺れ、下腹部の鈍い痛みだけが自分がまだ生きていることを教える」ゴゼイを介抱したのは、朝鮮人慰安婦であつた。黒砂糖の欠けらを口に押し込めてくれたのも彼女であつた——「唾液が溢れだし、白く細い命の根が伸びていくような気がする」。ゴゼイは「名前も知らないまま別れたことに胸が痛んだのは、ずっと後になってのことだった」と回想する。彼女はどこにいったのか、その生死さえ分からない。

共同体の記憶から抹消された人びとの痕跡をよみがえらせるには、どのようにすればよいのか。「群蝶の木」には、義明の視点にその手かがりが託されている。彼が幼稚園の年長であつたころ、友達の家遊びにいった帰り道、方向が分からなくなってしまう。「残飯や空瓶を載せたリヤカー」で家まで送り届けてくれたのはゴゼイだった。だが父親は「何が、汝や、人の童を何処に連れてい行じゃが?」「お前如き女子の、腐れリヤカーに我んが孫を乗せて歩きよるな。みな、心配してどれだけ探したんでい思ゆが?」と怒る。ゴゼイは「赦してきみ候え」と

「消え入りそうな声」で謝った。ゴゼイが「十名近い人に囲まれて」罵られているのを見ると、義明は「後ろめたさと恥ずかしさの感覚」を抱かされた。その感覚は「三十年経った今でも忘れることができない」という。長らく忘れていた記憶を想起し、なぜ黒砂糖の匂いをかぐのも嫌なのか、今その理由に思い当たった。道に迷った自分に、ゴゼイは黒砂糖を口に含ませてくれたのであった。義明は「自分の卑怯さ」から目を背けようとして、親切にもらった記憶を抑圧していたのである。子どもに悪戯をする噂されるのは、「眼の森の奥」（季刊「前夜」二〇〇四年秋号）二〇〇七年夏号の盛治も同じであった。両者に共通するのは、村人たちから「狂者」扱いされ、共同体の内部と外部との境界線上を生きざるを得ない境遇に立たされていたことであつた。

「後ろめたさと恥ずかしさの感覚」を抱き、「自分の卑怯さ」から目を背けようとしていた過去を内省できる人間こそ、共同体から排除された人間の生を凝視できる可能性がある。ゴゼイが黒砂糖の甘さとともに彼女の存在を思い出したように、義明は黒砂糖を通じて、それまで抑圧していたゴゼイの記憶をよみがえらせた。「雲が切れて月の光が差すと黄色い大きな蝶が群れるようにユウナの花が咲いている」——この木の下でゴゼイは在りし日の昭正の姿を思い抱きながら生きてきた。ゴゼイにとって、義明を連れて帰った「あの短い時間が、部落に住んでいて、一番楽しい時間だったさ。ほんとうに、せめてあんたの子供を身籠ることができていたらね……」と感じる。彼女にとって義明は、昭正との間の子どものように思えたのである。「ゴゼイ、ゴゼイよ。何を悔いる必要があるか」というセリフは、ゴゼイの胸に響く昭正の声であるが、沖繩戦の犠牲者すべてに向けられた悼みの声でもある。

## 注

- (1) レニ・ブレンナー『ファシズム時代のシオニズム』（芝健介訳、二〇〇一年七月、法政大学出版局、三〇頁）
- (2) 同右、三六三頁。
- (3) 同右、六頁。
- (4) 同右、一三五頁。
- (5) 『糸数アブチラガマ』（糸数アブチラガマ整備委員会編集、沖縄県南城市発行、一九九五年三月、一一頁）
- (6) 同右、三二～三三頁。
- (7) レギーナ・ミュールホイザー『戦場の性——独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』（姫岡とし子監訳、二〇一五年十二月、岩波書店、一一頁）。クリスタ・パウエル『ナチズムと強制売春——強制収容所特別棟の女性たち』（一九九六年五月、明石書店、四七頁）によれば、「労働成績の向上を期待したこと、ならびに、囚人の順応性を助長し、あるいは囚人たちのあいだに潜在抵抗の可能性を抑えるために囚人間の仲間割れを狙ったこと、こうしたことを優待策導入の、かつ強制収容所内に売春宿を設置することになった根拠とみるべきである」とする。
- (8) 『仲宗根誌』（仲宗根誌編集委員会編集、今帰仁村字仲宗根公民館発行、一九九六年八月、一〇四頁）
- (9) 同右
- (10) 玉城菜美路「今帰仁村内外の豊年祭」（「なきじん研究」第一九号、二〇一三年三月、一六五頁）

- (11) 折口信夫「国文学の発生（第三稿）」（『折口信夫全集』第一巻、中公文庫、一九七五年九月、二九頁）
- (12) 同右、二四頁。
- (13) 目取真俊「沖繩「戦後」ゼロ年」（二〇〇五年七月、NHK出版、四一頁）
- (14) 同右、四二頁。
- (15) 福地曠昭『沖繩女工哀史』（一九八五年三月、那覇出版社、九頁）
- (16) 前掲（13）、一〇七頁。
- (17) 前掲（15）、三二頁。
- (18) 前掲（15）、九一頁。
- (19) 前掲（15）、一〇九頁。
- (20) 『戦争と女性——慰安所マップ』が語るもの』（第五回「全国女性史研究交流のつどい」第一分科会メンバー、一九九二年九月、五頁）
- (21) 高里鈴代「強制従軍『慰安婦』」（『なは・女のあしあと 那覇市女性史（近代編）』、一九九八年一〇月、ドメス社、四五四〜四五九頁）
- (22) 玉城福子「沖繩戦の犠牲者をめぐる共感共苦の境界線——自治体史誌における「慰安婦」と「慰安所」の記述に着目して」（『フォーラム現代社会学』第一〇号、二〇一一年六月、一三〇〜一三一頁）
- (23) 玉城福子「沖縄県平和祈念資料館展示改ざん事件の再考——共犯化概念からみる植民地主義とセクシュアリテイ」（『女性・戦争・人権』第二三号、二〇一四年一二月、六九頁）
- (24) 独立混成第四旅団独立混成第一五連隊速射砲中隊陣中日誌（一九四四年一〇月三日）
- (25) 独立混成第四旅団独立混成第一五連隊第一大隊本部陣中日誌

- (26) 古賀徳子「沖繩戦における日本軍「慰安婦」制度の展開（4）」（『季刊戦争責任研究』第六三号、二〇〇九年三月、六九〜七〇頁）
  - (27) 前掲（13）、六五頁。
  - (28) 「今婦仁村の戦時状況（座談会）」（『沖縄県史』第一〇巻（沖縄戦記録2）、一九七四年三月、五一〜一頁）
  - (29) ブーリモ・レーヴィ「アウシュヴィッツは終わらない」（竹山博英訳、一九八〇年二月、朝日新聞出版、一〇八頁）
- 付記** 「群蝶の木」の本文は『群蝶の木』（二〇〇一年四月、朝日新聞社）に抛った。

（おにし やすみつ、三重大学人文学部教授）